

たばこミニ博物館

～「たばこ」の来し方と行く道～

南北アメリカ大陸の人類は数千年以上前に「たばこ」と出会った。大航海時代に海を渡り、奥深い魅力が西欧社会を魅了し始めたのは、わずか500年ほど前のことであった。今日、農業、産業、雇用、貿易などに大きな役割を持つに至ったが、21世紀は「たばこ社会」のあり方を見直す100年となるだろう。



松崎 俊一

(株)三和総合研究所
取締役
大阪本社研究開発本部長
研究開発第1部長
兼 研究開発第2部長

たばこを止めてしばらくの間、よくたばこの夢を見た。たとえば、山登りをして頂上にたどり着き、真っ青な空の下でほっとしてたばこに火をつける夢。ポケットからたばこを取り出して、深く一服喫い込んだところで、しまったと思いが覚める。香料のつまった豊かな味まで感じる夢であった。疲れや、緊張を和らげてくれる、それがたばこの魅力だと思っていた。

ところが一昨年スペインに遊んだおりのこと、闘牛場にて闘牛士と牛との死闘が絶頂(真実の瞬間)にさしかかろうとすると、回りの観客から一斉にたばこの煙が立ち上がった、隣に座る観客は、オーレオーレ!の歓声の合間に、たばこを持たない私を見かねて、箱ごと「お前もどうだ」と押し勧められることとなった。自分なら、生死を分けるこの場面、くわえたたばこの火をもみ消して、じっと固唾を飲んで、その瞬間を見守るのに、この国では両手のたばこに火をつけても足りない位の勢いで猛然と煙をふかせる。風土とは、かくも異なるたばこの魅力を創りわけけるものかと感じ、あらためてたばこ世界の奥深さを思った。そんなことがあってから、たばこに関する話や本などに関心を持ち、資料も手許に集めてみた。豪華なものはないけれど、誌面を借りて「たばこミニ博物館」を開館してみたい。愛煙家の皆様も、嫌煙家の皆様も、館内を一回りしていただけるなら、幸いである。

1. たばこの来し方

(1) たばことナス、ジャガイモは同科の植物

たばこは、ナス、トマト、ジャガイモ、ペチュニアなどと同じナス科の植物で、原産地はかつてはヨーロッパ、アフリカ、中国説があったが、ロシアの研究により南北アメ

リカ大陸原産が明らかになっている。野生種は60種以上確認されており、南北アメリカ大陸のほかオーストラリア大陸でも発見されている。かつて大陸が陸続きであったころからのたばこの進化の歴史が明らかになりつつある。

(2) たばこと人類の出会いには山火事

ユーラシア大陸から南北アメリカ大陸に移り住んだモンゴロイド(以下インディオ)は、紀元前6000年頃から農耕生活を始めたが、貯蔵や煮炊きの後の地層からカボチャ、トウモロコシと並んでたばこの種子が見つかっている。このことから、たばこと人類の出会いは、一般に次のように推測されている。

南北アメリカ大陸に定着したインディオは、たびたび、火山の爆発や落雷などが原因で起こる山火事にみまわれた。山火事が鎮火したあと、焼け残ったある種の葉っぱが、芳香を放ち、煙を吸い込むと快い刺激を与えてくれることを知った。この葉っぱこそが「たばこ」であった。

(3) たばこの西洋社会への道

インドをめざし、1492年8月3日、スペインのパロス港を出発したコロンブスは、70日余りの航海のすえ偶然西インド諸島サンサルバトルに到着した。そのインディオとの間で交換した品々の中に、「香り高い乾いた大きな葉っぱの束」があった。しかし、この葉っぱが何であり、どのように使うものか、コロンブス一行は全くわからなかった。周辺の島々を偵察するうち、現在のキューバで大きな葉っぱをくるくると巻き、火をつけて煙を喫うインディオがいることを発見し、探検記録に残した。その後、多くの探検家により南北アメリカのインディオの間で、喫う、嗅ぐ、噛むなどの方法で、たばこが愛好されていることが報告さ

れている。このなかに、Y字型の穴の空いた木の枝に、すりつぶしたたばこの葉をつめ鼻で嗅ぐtobagoという道具が紹介され、スペインに渡りtabacoと名前がついた。タバコ(tobacco)の始まりである。探検家のうち誰が西洋社会にたばこの種子を持ち帰ったかは明らかでないが、16世紀初頭には観賞用植物として栽培が始まり、のちに薬用植物として、急速に西洋社会に浸透していった。

商売としてたばこ販売を始めたのは、ジーン・ニコットというスペインの商業家であり、今日たばこ箱に表示されているニコチンという言葉は、このニコットという名前から始まった。

たばこの量産工場は、コロンブスが眠る街セビリアを買いで流れるのグアダルキビル川のほとりにロイヤル・スナッフ工場が建築されたのが始まりである。この工場は、メリメの小説「カルメン」でカルメンとホセの出会いの場所ともなり、ピゼー作曲の歌劇により世界に知られるようになった(現在セビリア大学として若い人でにぎわっている)

(4) たばこの日本への道

たばこの日本への伝来は資料としての記録はなく、口頭で語り伝えられるのみである。しかし、1543年にポルトガル人が種子島に漂着する前にはたばこは日本に存在しなかった。語り伝えによると、1549年8月15日宣教師フランシスコ・ザビエルが鹿児島島の稲荷川河口に上陸したとき、従者が煙を口から吐き出すのを見た土地の人が「南蛮は腹の中で火をたく」と驚いたと伝えられている。16世紀末には、喫煙風俗の風刺画が見られるなど、コロンブスの新大陸発

見から1世紀を経ぬ間に、地球の反対側の日本にも喫煙習慣が広がった。日本での葉たばこの栽培は、今の鹿児島県指宿市あたりで始まったとされており、1606年には「花は霧島、たばこは国分」と歌われるまでになっている。

たばこの嗜好が日本で急速に広まったのは、17世紀に入り流行した歌舞伎によると言われている。当時の社会現象であった「カブク」(自由気ままに振る舞う)ことを芸能にした歌舞伎が大衆の支持を受け、歌舞伎役者が異風異様大小様々な南蛮ギセルにたばこを詰め競って喫いあったことが流行を一気に大衆層に広める役割を果たした。歌舞伎で演じられる石川五右衛門、助六や弁天小僧の大見得に「キセル」は切り離せない道具である。また「客あれば茶より先にたばこ盆」と川柳にもうたわれたりした。

指宿から始まった外来の葉たばこの栽培も、大流行を受けて国内で品種改良が進み、江戸時代の末には「松川」「だるま」「遠州永島」など今も世界に誇る葉たばこが完成している。

(5) 嗜好品としてのたばこ

人類がたばこに出会ってから今日まで、薬品としてのたばこも嗜好品としてのたばこも、その摂取の方法はほとんど変わらない。材料や道具の進歩はあるものの喫う、嗅ぐ、嘔むの方法で新大陸から学んだとおりの方法が引き継がれている。(表1)

2. たばこの今

(1) 世界の葉たばこ

南北アメリカ大陸から持ち出された葉たばこの種子は、

表1 嗜好品としてのたばこの種類

たばこ製品の種類		嗜好の方法	
たばこ製品	喫煙たばこ	紙巻たばこ	世界のたばこの中心。歴史は新しく、19世紀クリミア戦争中に兵士が火薬を包む紙で巻いて喫ったのがおこりとか
		葉巻たばこ	たばこの葉を発酵させ巻いて喫う
		手巻たばこ	刻みたばこをトウモロコシの葉などで巻いて喫う
		パイプたばこ	キセルに詰めて喫う、水を通して喫う水ギセルもある
	非喫煙たばこ	噛みたばこ	たばこ葉を幅広く刻んで、ビンロウや石灰を混ぜて嘔む
	嗅ぎたばこ	たばこ葉を粉にして鼻から喫う。欧米、インド、中国で一時大流行した	

(出典：川床邦夫『中国たばこの世界』(東方書店))

表2 葉たばこの種類

	特 徴	代表的な商品
黄色葉	葉たばこの中心、世界の葉たばこの40%を占める	ピース、パイプたばこ
パーレー葉	世界の葉たばこの15%を占める、アメリカン・ブレンドたばこに利用	キャメル
オリエント葉	香り豊で主にブレント用	カレント
在来葉	世界各地で改良生産されている。日本では江戸時代に換金作物として普及した	(朝日)、マールポロ
ハバナ葉、マニラ種、スマトラ種	葉巻たばことして利用される、ハバナ葉は高価貴重品種	アルカディア、葉巻たばこ

注：朝日は現在は生産されていない
 (出典：『商品大辞典』(東洋経済新報社) 『たばこに続く道』(有斐閣)より作成)

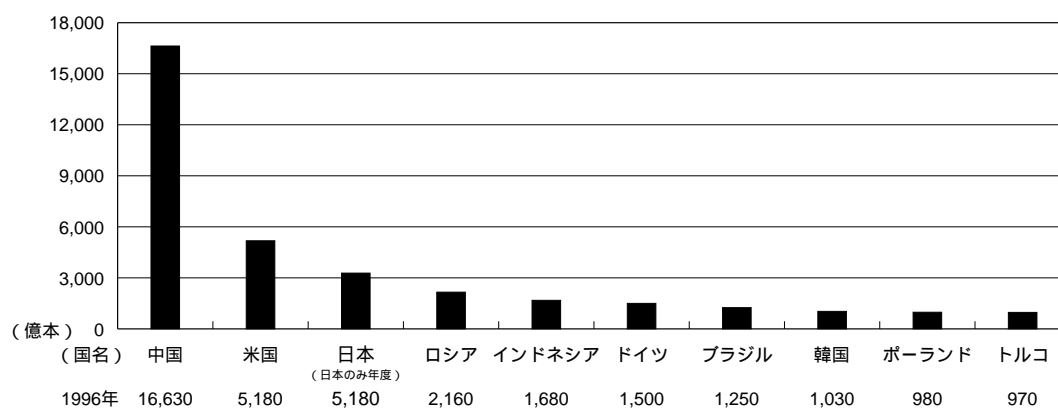
表3 - 1 世界のたばこ市場規模

単位：億本

	1996	1997	1998	1999
アジア・オセアニア	27,662	27,764	26,971	26,807
西欧	5,986	5,991	6,059	6,103
中東欧	5,432	5,592	6,274	6,557
南北アメリカ	7,895	7,873	7,546	7,167
アフリカ・中東	3,427	4,001	4,052	4,141
その他	6,726	6,206	4,155	3,055
世界計	57,128	57,426	55,057	53,830

(出典：ERC World Cigarettes “The 2000 Survey Volume v”
 The Maxwell Report “Top World Cigarette Market Leaders 2000”)

表3 - 2 世界のたばこ市場



(出典：JT調べ)

世界各地で品種改良が進み、今日では寒冷地を除く世界各地でさまざまな種類の葉たばこが栽培され、たばことして商品化されている。なかでも「黄色葉」は世界75カ国以上で栽培され、全世界の葉たばこ生産量の40%程度を占める。スペインやイギリスといった列強諸国の技術

指導により南米、アフリカ、東南アジアに栽培が広まり、ゴムや茶と同じ植民地支配の産物ともいえる品種である。「パーレー葉」は、生産高で全世界の葉たばこの15%程度を占める。その8割がアメリカで生産され、アメリカ人の嗜好に沿った葉たばこである。この葉を用いてブレント

されたたばこはアメリカン・ブレントと称される。その他、香り豊かな「オリエント葉」、貴重性が高い葉巻用の「ハバナ葉」などがある。わが国で品種改良が進んだ「在来葉」は前述のとおりである。(表2)

(2) 世界のたばこ消費量

世界のたばこ消費量は年間5～6兆本である。うち中国が1.6兆本、世界の3割を喫っている。このため地域別にみてもアジア・オセアニア地域で世界の半分近くを消費している。(表3-1)

(3) 世界のたばこ企業

世界の主要なたばこ企業はアメリカ、イギリス、日本の3国に集中しており、のシェアは上位4社で世界の40%を超している。わが国唯一のたばこ企業日本たばこ産業株式会社(JT)は1999年にRJ Reynoldsから北米以外の地域のたばこ販売権を取得し、2000年には世界の8.3%のシェアをもっている。(表4)

(4) わが国のたばこ産業

わが国のたばこ企業の歴史は1898(明治37)年に専売制度が施行されることにより大きく変化した。1898年以前は、民営の時代で全国に大小様々なたばこ商店が覇を競い合った。なかでも東京の岩谷商会(銘柄「天狗」と京都の村井兄弟社(銘柄「サンライズ」「ヒーロー」)による販売競争は「たばこと塩の博物館(東京渋谷)」でその熾烈さを見ることができる。1898年以降は、政府が専売局を設けてたばこの販売を独占することとなった。専売制度による最初

の口付きたばこは、愛煙家としても有名であった本居宣長の「敷島の和ごころを人問わば朝日ににおう山桜花」より命名された「敷島」「大和」「朝日」「山桜」であったのはおもしろい。その後1949年には日本専売公社設立による法人化、1985年にはたばこ事業法、日本たばこ産業株式会社法による日本たばこ産業株式会社設立を経たものの、たばこ販売は財務大臣による許可事業となっている。

日本たばこ産業株式会社の2000年度たばこ事業による売上高(連結)は4.1兆円、その営業利益は1,659億円に上り、医薬品、バイオや食品事業においてもわが国を代表する企業となっている。

国内産たばこの販売量はこの10年間に約11%減少し、これにともない国内の葉たばこ生産農家数は10年間に40%減少している。しかし平成12年現在も23,128人の農家が葉たばこの作付けを行っており、たばこは多くの農家の農業収入を支えている。(表5、6、7)

日本たばこ産業株式会社が雇用するたばこ製造工場の従業員は2000年度末に19.4千人、財務大臣によるたばこ小売販売者許可者数は306千人にのぼり、雇用面での役割も大きい。

(5) たばこの税金

250円のたばこ一箱に占める国内での各種税金の合計は、2002年1月現在で計153.34円(たばこ小売価格の61.3%)となっている。内訳は、従量税としての国たばこ税54.32円(同21.7%)、たばこ特別税16.40円(同6.6%)、地方たばこ税70.72円(同28.3%)、このほかに消費税とし

表4 世界のたばこ企業別シェア

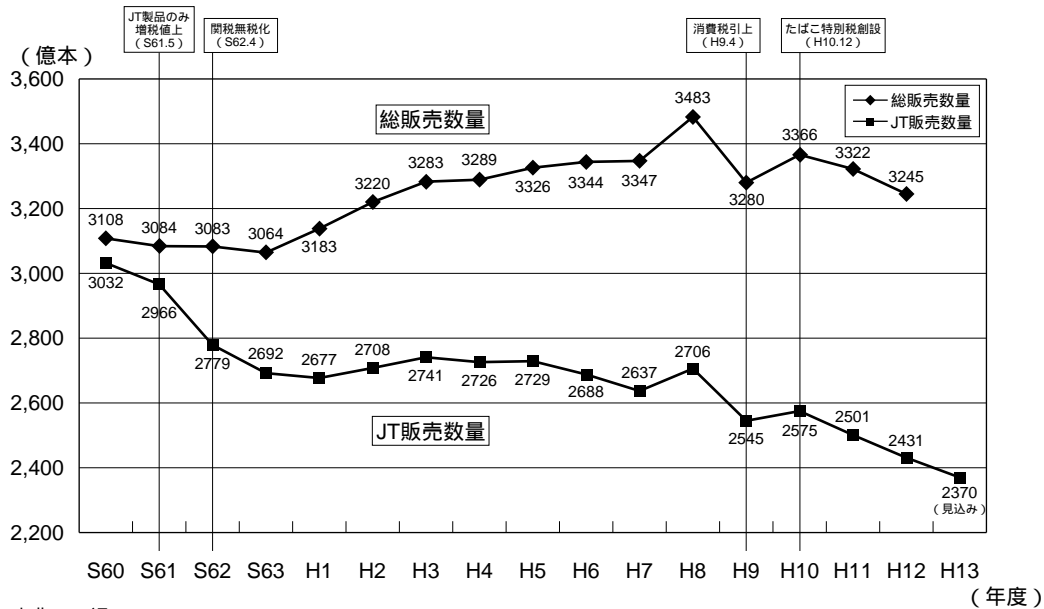
会社名\年	1996	1997	1998	1999	2000
Philip Morris	15.6	16.5	17.2	15.9	16.8
British American Tobacco	12.2	12.4	13	13.7	15
JT	5	4.5	4.6	8.4	8.3
RJ Reynolds *1	5.5	5.6	5.4	1.7	1.8
Rothmans *2	3.9	4.2	4.2	1.3	N/A

*1 1999年同社の米国以外の全海外たばこ事業をJTが買収

*2 1999年British American Tobaccoが買収

(出典: The Maxwell Report "Top World Cigarette Market Leaders 2000")

表5 国内紙巻きたばこ販売数量の推移



(出典：JT調べ)

表6 JTの業績(連結)

単位：億円

	1998	1999	2000
売上高	38,764	43,710	45,015
たばこ事業	36,167	40,244	41,402
国内たばこ事業	34,955	36,457	35,712
海外たばこ事業	1,171	3,787	5,690
医薬品事業	237	677	664
食品事業	1,507	1,950	2,103
飲料事業		1,487	1,654
加工食品事業		433	416
その他	853	839	846
営業利益	1,700	1,539	1,392
たばこ事業	1,938	1,815	1,659
医薬品事業	-126	-114	-128
食品事業	-86	-145	-173
その他	-26	-17	34

(出典：日本たばこ産業株式会社『2001ファクトブック』)

て税率5%(金額11.9円)が内税としてたばこ価格250円に含まれている。たばこの消費により平成13年度に納められた税金の総額は、国税計11,469億円、地方税計11,456億円、国と地方税合計22,925億円であった。この額は、平成13年度の一般会計予算に組まれた社会福祉予算

表7 葉たばこ耕作の状況

	耕作農家 人	耕作面積 ha
平成2年	42,170	30,264
平成12年	23,128	24,173
うち1000人以上の地域	岩手県	3,735
	福島県	2,505
	青森県	1,770
	鹿児島県	1,502
	宮崎県	1,461
	熊本県	1,457
	秋田県	1,125

(出典：全国たばこ耕作組合中央会資料)

16,944億円と教育振興予算6,484億円の合計をほぼ賄う額である。

欧米諸国のたばこ税率と比較してみると、わが国のたばこ税率は欧州並の水準である(表8、9)。

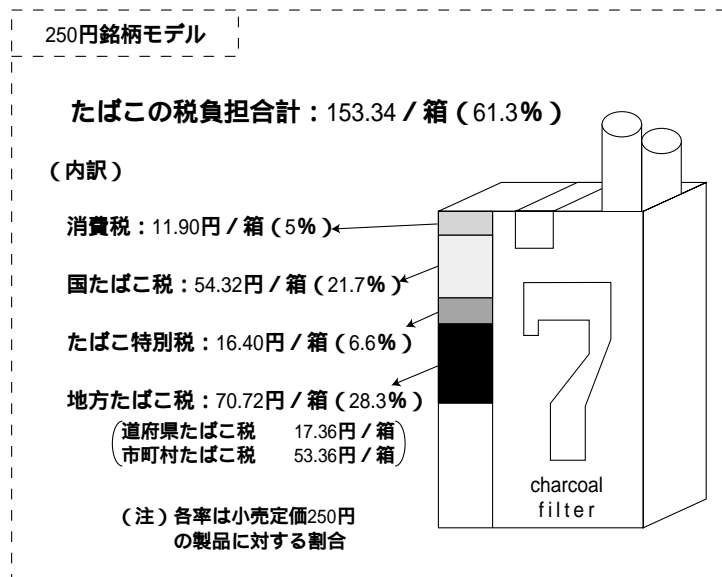
3. たばこの行く道

(1) たばこの魅力

JTの調査によると、喫煙者に「なぜあなたはたばこを喫いますか」と訪ねたところ7割以上から、

表8 たばこ税の仕組み

税率表		(単位：円/千本)			
国たばこ税	たばこ特別	地方たばこ税	合計	消費税	
2,716	820	3,536	内道府県：868 内市町村：2,668	7,072	5%(内税)



(出典：JT調べ)

表9 たばこ税率の比較 (2001.12.25現在)

	日本	イギリス	ドイツ	フランス	アメリカ (NY)
銘柄	マイルドセブン	Lambert&Butler	WEST	ゴロワーズ	マールボロ
平均小売価格	250円	3.86 £	5.15DM	17.0FFr	4.69 \$
円換算 (2001.12.25現在)	250円	738円	305円	301円	615円
たばこ税率	59.4	69.8	59.2	60.7	32.6
付加価値税率	5.0	14.9	16.4	16.4	8.3

(出典：JT資料等から作成)

仕事が一段落したときによい
 ちょっと気分転換したいときによい
 イライラしたときによい
 手持ちぶさたなときによい
 友達と雑談しているときによい
 人と会っているときによい
 アイデアや計画を練っているときによい

という回答が返ってきている。たばこに含まれるニコチンは脳の刺激、自律神経の興奮や麻痺といった薬理作用をもっている。これにより、たばこを喫うことにより、あるときは精神が沈静し、あるときは高揚もする、たばこに含まれるニコチンの不思議な働きである。たばこの煙に含まれるニコチンは肺に入ってからわずか7秒の間に血管を通して心臓から脳に至るが、たばこを離すと急

表10 - 1 わが国の年代別喫煙率の推移（男性）

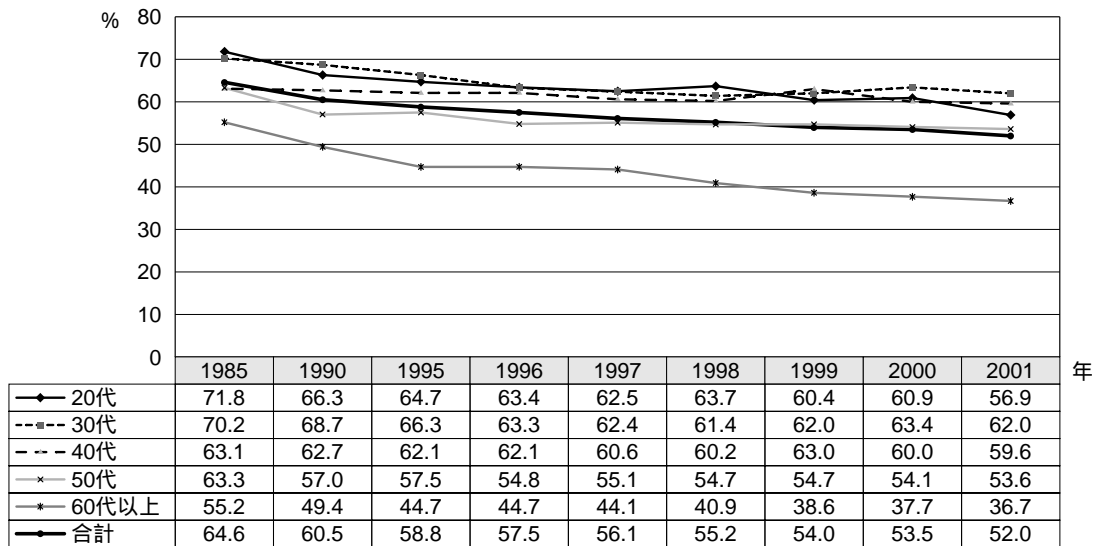
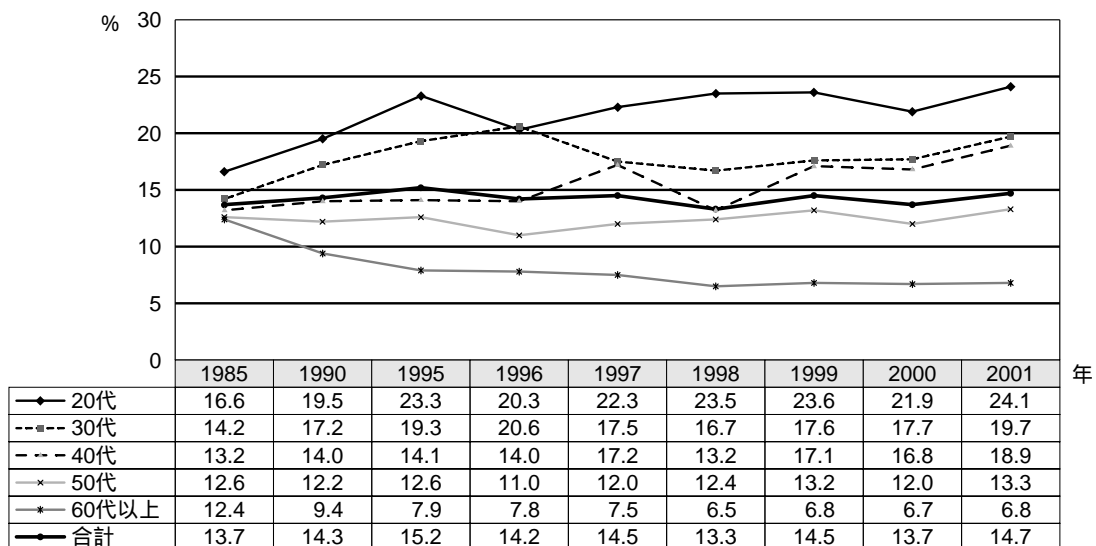


表10 - 2 わが国の年代別喫煙率の推移（女性）



（出典：JT調べ）

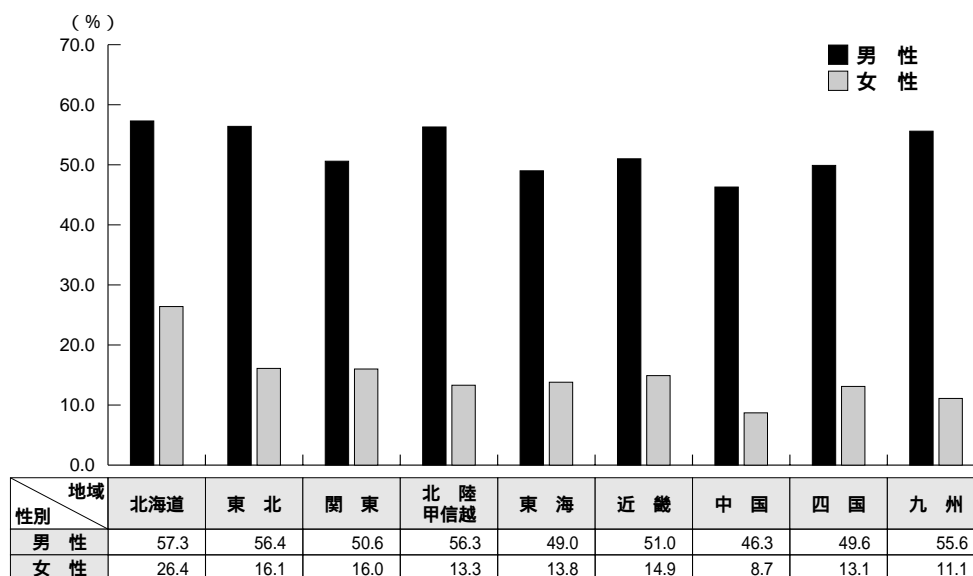
速に体外に排出されることが確かめられている。

わが国成人男女の喫煙率は2001年5月現在男性52.0%、女性14.7%である。1985年には男性64.6%、女性13.7%であったから、この16年の間に男性の喫煙率は徐々に低下しているが、逆に女性の喫煙率は上昇傾向にある。内訳を見てみると、男性では20歳代と60歳代以上の喫煙率の低下が目立ち、女性では20歳代の喫煙率が上昇している。

国内地域別には、男性、女性ともに北海道地域の喫煙率が高く、とくに北海道地域の女性の喫煙率は中国地域の女性の喫煙率の3倍となっている。（表10、11）

世界の主要国の喫煙率はWHO（世界保健機関）が調べている。1999年の調べによると男性の喫煙率が50%を超えているのは韓国、ロシア、トルコ、中国、バングラデシュ、インドネシア、日本、ポーランドの8カ国、女性

表11 国内地域別喫煙率



(出典：JT News Release 2001.10.25)

表12 世界の主要国の喫煙率

<男性喫煙率降順> 単位：%

国名	男性 (%)	女性 (%)
韓国	68.2	6.7
ロシア	67.0	30.0
トルコ	63.0	24.0
中国	61.0	7.0
パングラデシュ	60.0	15.0
インドネシア	53.0	4.0
日本	52.0	14.7
ポーランド	51.0	29.0
キューバ	49.3	24.5
タイ	49.0	4.0
スペイン	48.0	25.0
ギリシャ	46.0	28.0
イスラエル	45.0	30.0
オーストリア	42.0	27.0
フランス	40.0	27.0
イタリア	38.0	26.0
ポルトガル	38.0	15.0
ドイツ	36.8	21.5
ノルウェー	36.4	35.5
オランダ	36.0	29.0
スイス	36.0	26.0
シンガポール	31.9	2.7
カナダ	31.0	29.0
オーストラリア	29.0	21.0
アメリカ	28.1	23.5
イギリス	28.0	26.0
スウェーデン	22.0	24.0

(出典：1999年WHO調べ、日本は2001年5月JT調べ)

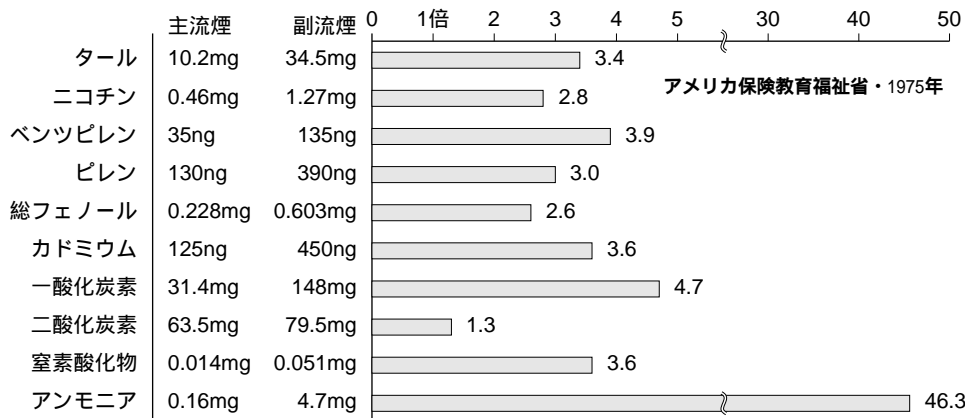
の喫煙率が30%を超えているのはノルウェー、イスラエル、ロシアの3カ国である。女性の喫煙率が男性を上回っているのはスウェーデン、男性と女性の喫煙率が拮抗しているのはノルウェー、カナダ、オーストリア、アメリカ、イギリスという結果が出ている。(表12)

(2) たばこの危険性

2001年12月に神戸で「たばこ規制の経済、社会、健康問題に関する国際会議」(WHO神戸センター主催)が開催された。冒頭WHOジュネーブ本部のプロジェクト・マネージャーであるダ・コスタ・エ・シルバ博士は「世界においてタバコによる死者は年間420万人となっており、25年後には死者の数は年間1000万人にのぼると予想される」と警告を発している。今日では数多くの症例から、喫煙者にガン発症率が高いことや、喫煙女性からは低体重児が生まれやすいなどの傾向も発表されている。

たばこに含まれるニコチンは肺から体内に入りわずか7秒で脳に達し、また直ちに体外に排出されるものであるが、これを常習的に繰り返すと、ニコチンなしではいられないという、やっかいな禁断症状をひきおこす薬理作用も併せ持っている。喫煙にともなうニコチンは喫煙者が喫う煙

表13 一本のたばこの主流煙と副流煙に含まれる化学成分



1ng (ナノグラム) は1mgの100万分の1。タールとニコチンは、フィルター付タバコの場合。

(出典：『暮らしの手帳』(1982年7・8月号))

表14 世界の主な国の喫煙ルール

	広 告	たばこ箱の表示	喫煙ルール、法律等
イギリス	1965年電波媒体によるCM禁止	きびしい警告表示	病院、学校、交通機関の喫煙規制進む。60%以上の企業で禁煙、分煙導入
アメリカ	1971年電波媒体によるCM禁止	肺ガン、心臓病等具体的な有害性の表示を法律で定めている	ほとんどの州で喫煙規制を条例化している
フランス	1993年すべての広告が禁止	警告表示	1992年禁煙法施行。閉鎖空間での喫煙が禁止
シンガポール	1970年すべての広告が禁止	きびしい警告表示	国全体での喫煙規制が進む。たばこのポイ捨ては罰金刑
中国	政府方針により自粛	警告表示	1992年公共场所での禁煙法施行
韓国	電波媒体によるCM禁止	きびしい警告表示	1995年喫煙規制法施行
日本	1998年以降電波媒体による銘柄CM自主規制	警告表示	約1000の自治体がポイ捨て禁止条例施行

(出典：『「たばこ病」読本』(緑風出版))

(主流煙)以上に、灰皿に置いたたばこから立ち上る煙(副流煙)に多く含まれている。副流煙には主流煙の46.3倍のアンモニアが含まれており、灰皿の置きたばこの煙がことさらにしみるわけである。(表13)

1960年代以降喫煙の是非をめぐる議論がまきおこり、70年代に入りWHOが世界各国をリードして喫煙対策についての決議や勧告が行ってきた。この結果、現在世界の主要国では、たばこ広告の禁止や規制、たばこの箱への警告表示、公共の場所での喫煙ルールづくりが進められている。

わが国では、1965年東京三鷹市が新庁舎での分煙を開始したのが、喫煙対策の始まりであった。その後のわが

国の喫煙対策の取り組みは1975年に新幹線「こだま」号自由席車両に禁煙車が登場するまで待たねばならなかったことを考えると、三鷹市の分煙の取り組みは、振り返ってみれば世界的にも画期的な出来事であった。わが国政府の取り組みは世界各国に比して遅れ気味で、1996年に人事院が「公共職場における喫煙対策指針」を発表し、1997年には郵政省が全職場と郵便局の分煙を開始することに始まる。三鷹市から薮ヶ関にたどり着くまで30年以上の歳月が流れたことになる。(表14、15)

(3) 社会と生活に溶け込んだ道具へ

たばこを喫わなくなって4年目の春を迎える。人に話

表15 わが国の公共の場所での喫煙ルール

	1978年当時	現 在
病院	国立病院待合室のみ禁煙	ほとんどすべての病院で禁煙・分煙
JR列車	新幹線「こだま」自由席に1両の禁煙車両を連結	新幹線、特急、急行の60%以上の車両が禁煙車両
JRホーム	喫煙ルールなし	喫煙コーナーを設置し分煙の導入
地下鉄	ホーム、構内ともに喫煙ルールなし	全国9都市の地下鉄駅ホーム、構内が終日全面禁煙
観光バス	禁煙車両なし	大半の車両が走行中禁煙
旅客機	禁煙席が設置	ほとんどの航空会社で国際、国内線とも全席禁煙
学校	教室では禁煙	教室では禁煙、教職員室も分煙が進む
中央官庁	喫煙ルールなし	96年人事院「公務職場における喫煙対策指針」発表、郵政省が97年から分煙スタート
銀行	喫煙ルールなし	灰皿の数を減らしている
飲食店	一部に分煙が始まる	分煙実施の比率が高まる

(出典：厚生省ホームページ、『「たばこ病」読本』(緑風出版)等より作成)

を聞き、図書館に資料を求めつつ、これからの「たばこの行く道」はどこにあるのだろうかと考えてみた。

西欧社会に喫煙が紹介されて500年、この間大衆社会に喫煙習慣が浸透し消費量は拡大の一途をたどってきた、この結果それぞれの国で、農業、産業、雇用、貿易などでたばこは大きな役割を担っている。しかし、ここへ来て、欧米やわが国の喫煙率は低下傾向にあり、わが国では葉たばこの栽培農家の減少、たばこ製造に関わる従業員の減少などが始まっている。

インディオがたばこに出会って数千年が経つ、このう

ち西洋社会でたばこが愉しまれた時期はわずか500年間に過ぎない。喫煙者だけでなく、たばこに関わるあらゆる人、企業がたばこを「自分が愉しめればよい道具」ととらえる限り、この500年間に獲得したものは限りなく無になるかもしれないと思っている

しかし、数千年の間インディオがたばこを愉しんできたのと同じように「社会と生活の中に溶け込んだ道具」として認識し扱えるなら、世界中の大人を惹きつけるたばこの奥深い魅力は不変である。

(参考文献)

- ・日本たばこ産業株式会社2001年3月31日アニュアルレポート「2001Changes」
- ・日本たばこ産業株式会社2001年度 会社案内、ホームページ
- ・日本たばこ産業株式会社2001ファクトブック
- ・日本たばこ産業株式会社 JT News Release No.22 (2001年10月25日)
- ・宇賀田為吉著 『たばこの歴史』(岩波新書)
- ・村上征著 『たばこ屋さんが書いたたばこの本』(三水社)
- ・大川俊博著 『たばこに続く道』(有斐閣)
- ・川床邦夫著 『中国たばこの世界』(東方書店)
- ・高橋浩之・平井慎二著 『ステイ・クリーン』(ぱすてる書房)
- ・渡辺文学著 『「たばこ病」読本』(緑風出版)
- ・『商品大辞典』(東洋経済新報社)
- ・財務省、WHO神戸センター、全国たばこ耕作組合各ホームページ
- ・日本たばこ産業株式会社 コーポレートコミュニケーショングループ提供資料
- ・「たばこと塩の博物館」展示資料(東京渋谷、JT)